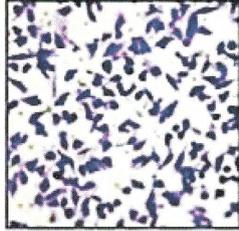


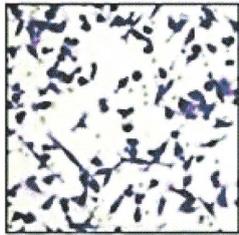
「トリプルネガティブ乳がん」悪化原因 タンパク質を特定

弘前大 治療法開発に期待

通常時のがん細胞



「FNDC3A」の発現を抑制させた時のがん細胞



弘前大は14日、乳がん患者の約20%を占める「トリプルネガティブ乳がん」を悪化させる原因となるタンパク質を特定したと発表した。治りが悪く、明確な治療法が開発されていなかったが、治療標的となる因子の発見により、新たな治療法の開発につながることを期待される。

悪化させる因子として特定したのは「FNDC3A」と呼ばれるタンパク質で、大学の解析により、このタンパク質が多いほど、患者の生存率が下がることが判明。さらに「FNDC3A」の発現を抑えた細胞では、がん細胞を増殖させることで知られるタンパク質「YAP1」が減少することも分かった。

同大農学生命科学部食料資源学科の西塚誠准教授は「新たに治療標的が見いだされた。ただ、細胞レベルの発見にとどまっているため、今後の実験などで効果を見ていく必要がある」としている。（加藤弘也）

この画像は、当該ページに限って”デーリー東北”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。